

神経性食欲不振症の診断基準（厚生労働省特定疾患・神経性食欲不振症調査研究班）

1. 標準体重の-20%以上のやせ
2. 食行動の異常（不食、大食、隠れ食いなど）
3. 体重や体型についての歪んだ認識
（体重増加に対する極端な恐怖など）
4. 発症年齢：30歳以下
- 5.（女性ならば）無月経
6. やせの原因と考えられる器質性疾患がない。

（備考）1、2、3、5 は既往歴を含む。（例えば、20%以上のやせがかってあれば、現在はそうでなくても基準を満たすとする。）6項目すべてを満たさないものは、疑診例として経過観察する。

1. ある時期にはじまり、3ヶ月以上持続。典型例は-25%以上やせている。-20%は一応の目安である。（他の条項をすべて満たしていれば、初期のケースなどでは、-20%に達していなくてもよい。）アメリカ精神医学会の基準（DSM-III-R）では-15%以上としている。標準体重は15歳以上では身長により算定（例、平田の方法）するが、15歳以下では実測値（例、日比の表）により求める。
2. 食べないばかりでなく、経過中には大食になることが多い。大食には、しばしば自己誘発性嘔吐や下剤・利尿剤乱用を伴う。その他、食物の貯蔵、盗食などがみられる。また、過度に活動する傾向を伴うことが多い。
3. 極端なやせ願望、ボディイメージの障害（例えば、ひどくやせていてもこれでよいと考えたり、肥っていると感じたり、下腹や足など体のある部分がひどく肥っていると信じたりすること）などを含む。これらの点では病的と思っていないことが多い。この項は、自分の希望する体重について問診したり、低体重を維持しようとする患者の言動に着目すると明らかになることがある。
4. まれに30歳をこえる。ほとんどは25歳以下で思春期に多い。
5. 性器出血がホルモン投与によってのみ起こる場合は無月経とする。その他の身体症状としては、うぶ毛密生、徐脈、便秘、低血圧、低体温、浮腫などを伴うことがある。ときに男性例がある。
6. 精神分裂病による奇異な拒食、うつ病による食欲不振、単なる心因反応（身内の死亡など）による一時的な摂食低下などを鑑別する。